



太平洋国立大学 / むさしの・多摩・ハバロフスク協会共催 環境セミナー ネット会議報告

今年は 20 年以上続いているハバロフスク植林ボランティアツアーが新型コロナ感染症騒ぎで中止になり、ロシア側関係者だけによる植林のほか、ネット利用による太平洋国立大学と協会との環境セミナーが実施されました。ここではセミナーの様子を私の感想を交えてご報告します。

2020 年 4 月 29 日午前 10 時（ハバロフスクは 11 時）からセミナーが開始されました。直前に調整時間があり、安藤理事長がコンピューターを振って自宅の庭を写したりして一挙に和やかな雰囲気になりました。ロシアと日本の間のシステムは予想以上にスムーズにつながり、画面も鮮明でした。

最初に太平洋国立大学のニコライ・プガチョフ副学長から挨拶と、毎年の当協会の活動を高く評価していると感謝の言葉が有りました。これを受けて安藤理事長が、今年の訪問中止は残念だが、ロシア側の皆様と画面を通じて交流できるのは嬉しいと挨拶しました。

リュドミラ・マイオローワ准教授からの報告では、衛星データの比較から、コロナ問題で世界のエネルギー活動が低下して世界の大気環境改善が進んでいると、興味深い指摘がありました。

パーベル・リャブヒン自然利用・環境学部長からは、太平洋国立大学における研究計画として、ドローンを利用するハバロフスクの環境調査や、日口の植林活動の成果調査を進める件が述べられました。

ニコライ・ヴィヴォドツェフ教授からは太平洋国立大学の様子や当協会元理事で当大学に留学していた小林亮介

氏のことなどが話されました。

日本側の報告として、まず安藤理事長が日本のコロナウイルス感染症の現状や武蔵野市への影響、そして日本でとられている対策をかなり詳しく報告しました。今回のセミナー開催日がまだ日本のゴールデンウィーク直前の不安な時期であり、ロシア側はまだ感染急増の直前の時期だったので、これは双方に関心の深い話題でした。

長島からは、今回のコロナウイルス感染症の影響で、国際交流にどのような影響が残るかとの予測や、感染症発生源ともなる野生動物の生息圏と開発の関係、大学教育とパンデミックの影響といった、やや広い視点での植林活動や環境保護活動について話しました。

新しい課題がたくさんあるので、隣国同士の日本とロシアの協力を盛んにすることは重要で、ハバロフスクとの交流は大きな価値があると強調しました。

私の個人的感想としては、今回のネットセミナーは終始なごやかな雰囲気、パーベル・リャブヒン学部長の司会もスムーズに進められました。オルロフ氏の通訳も適切で、会議は成功であったと思います。

現地を訪問する交流はこれからも当然続けるにしても、それに加えて今後もテーマを絞ってネットセミナーも開催し、会員や学生と一緒に視聴できるようにするのもよいでしょう。出来れば協会の外へも公開して、新会員勧誘や協賛団体獲得に役立てたいものです。

コロナ騒ぎの早い終息と協会活動の発展を期待しましょう。
(顧問：長島 昭)